

『ビジュナリ・コンパクト』

——ピューリタニズムとアメリカ文学——

坂下昇

序説 “顔”が見えぬ

——“Pilgrim Fathers” 巡礼の父祖たち——

わが目は見たり 怒れる神のきませる栄えを 怒りのふとうを踏みしだき、
かの恐ろしき疾風の剣 いな妻のごとふりかさしたもう。

ジュリア・ワード・ハウ 『共和国の戦いの歌』(一八六二)

(1) 一六世紀宗教改革の大きなうねりの一つであったピューリタニズムが、内からの改革を遂に断念し、外なる世界にユートピア建設を夢見るにいたった経緯については、ここで纏説の必要はないと思う。“Brave New World”『美

しい新世界』(シエークスピアの劇『嵐』)にでてくる有名な句)の展望は、英国エリザベス王朝下すでに広く一般に知られていて、現実に女王の廷臣で、詩才に長けた武人で野心家のサー・ウォールター・ローリーは船隊を率いて北アメリカの探検に乗り出し、帰国後大胆で大規模の植民計画書を提出するに及んで、一気にひろがった。(この次第は Hakluyt という人の『万国航海記』に詳しく書いてある)。かくして、一六世紀末の北米バージニアの地に対する女王の開拓免許書はこうして発布された。処女王 *Virgin Queen* を記念してこの地を *Virginia* と呼ぶことになった。かくして始まった英国のアメリカ植民事業は、当初の薔薇色のロマンや希望にもかかわらず惨憺たる悲劇の経過を辿りながらやがて建設完成の道を進むのだが、そのことは本日の議題とは直接には関係がないので、省略する(先駆者たちの名にちなんだ煙草の名が今日でも親しまれていることを銘記されよ)。ただ、バージニアにきた英国人たちはいわば『アンシャン・レジム』に属する人たちであった。彼らは、宗教的には英国教会派に属し、それこそはピューリタンたちが、大なり小なり、離反し、反逆し、憎しみ合い、軽蔑し合ってきたところの当の相手方だったのである。このことは、のちの南北戦争に象徴される対立と相剋の歴史に照らし、嚴重に区別して考えておく必要がある。

(2) 南のバージニアと違い、ピューリタンたちが渡来したのはアメリカ合衆国の北部、今日でもニューイングランドという地名で知られる地域、つまり、マサチューセッツ湾を中心とする一帯であった。ここに渡来した約一〇〇人の植民者は、その乗船の名『メイフラワー』と彼らの自称『巡礼の父祖』の名で、いまや広く知られ、アメリカのハイスクールの教科書の巻頭にもそう書いてある。これの分離主義者たちはバージニア植民に遅れること二十数年、一六二一年にマサチューセッツ湾の一部、プリマスの地に上陸した。彼らに言わせれば、そこは聖書にある『吼える荒野』だった―自分らをエジプトを出て荒野を彷徨ったイスラエルの民に擬した彼らには、この未開野蛮の地がそう見えたのである。巡礼者とはその意味である。だが、ここで大切なことは彼らの中には、ピューリタンの出身者もいる

にはいたが、英国を出て以来、終始「分離主義者—分離教会派」と呼んでいたのである。さらに、歴史の運命はやがてこれら分離主義者をも、ボストンを本拠とする「正統派ピューリタン」と呼称する、同じ英国の宗教改革派出身者（いわゆるカルヴィンを始祖とするプロテスタント派）に吸収合併されることになるのだが、それはマサチューセッツでわずと先の話である。

(3) ここで、「ピューリタン」と称した植民者とは、一六三〇年英国王チャールズの免許、「チャーター」を正式にえて（換言すれば、王の財政的バックアップによる植民社会を設立し、植民者を公募して）渡来した人たちをいう。従って、神の国、ユートピア建設のビジョンを志向する点では分離主義者らも正統ピューリタンも共通だったにせよ、前者は現状の墮落と腐敗に反乱して、英国教会を飛び出した人（「カム・アウト」した人）たちだったのに対し、後者はおなじく英国教会の改革の現状に対しては容認できない点は共通なものだが、英国教会を出るのではなく、これを外に作ることによって、宗教改革に実現を図りたいと主張した人たちだった。つまり、正統ピューリタンらにいわせれば、自分らのゆくニューイングランドはあくまでも、その意味での新しい英国、つまり「ザ・ニューイン・グラント」だというのであった。事実、彼らは初め英国教会の信仰形式と教会制度を持ち込んだのである。かくして、植民会社の定款が綿密に規定され、会社重役の権限が精密に明文化された。会社社長には、英国植民政策の伝統に従い、知事（Governor）の称号が与えられた。

こうして農園主で法律家のウインスロップが知事に任命され、大船団をひきいてアメリカに渡来したのが一九三〇年のこと、今のボストンの地にマサチューセッツ湾植民会社を設置したのはその翌年の春のことであった。

(4) マサチューセッツ湾植民会社を英国が多く海外に経営していた植民地、なかんずく、同じアメリカの南、バージニア会社と著しく異ならしめていた、大きな特徴があった。それは通常の植民会社の本部事務所はすべてロンドンに

置かれていて、知事は国内に常駐していたのに対して、こちらの場合はその規定がなく、むしろ、現地経営は認めるような字句になった。ロンドンに本部を置く限り、経営は常時国王の監督統制下に置かれる。その規定がないということが経営の主権にとって（換言すれば、後のアメリカの独立気勢にとって、どんなに重大な意味をもっていたかは、ここで纏説の必要はない。マサチューセッツ湾の他の部分には、先に述べたプリムスに上陸した「巡礼者」の一隊のほかに、北のセーラム湾に植民した別派ピューリタンの一隊がいたのだが、このボストンの一隊のような性質の国王の免許「チャーター」は交付されていなかった。

（なお、「チャーター」が経済的になにを意味したかは、ウインズロップの乗船、アーベラ号の次の積み荷で推察されたい…ウイン一万ガロン、ビール四二トン、水一四トン。）

英国王チャールズが何故このような「手抜き」を冒したのか、それともどこかに作為があったのかは今も解けぬ謎である（ケーンブリッジを中心とする改革運動者らは何回か会議して、この免許の文章を練ったようで、知事候補者のウインズロップもこれに参加している）。一つだけ判明している史実がある…1、ピューリタンに対する迫害弾劾の手は迫り、同志の間から次々と殉難者を生み、英国内に残る改革運動者の運命は風前の灯火に見えたこと。2、一方、国王チャールズは国内反対者、なかならず国内に燦るピューリタン勢力の反逆気勢との対応に追われ、応接に暇なかったこと（はしくなく、やがては彼自身を断頭台に送ることになるはずの内乱は免許発行の翌年から始まったのである）。

(5) こうして、プロテスタントらが、その狂熱の最初から夢見た「神の恵みとの契約」(Covenant of Grace) による地上天国の建設の夢は国王の保護（法律的には）を基礎とする強力な植民地経営によって、実現への展望が開けたのである。それはユートピア論者が命を賭けて推進した、人間意志の自由の理想郷でもなければ、プロテスタント左派の分離主義者たちが、国外に逃れてまでも守り通そうとした信仰自由の理想の国のイメージでもなかった。だが、なには

ともあれ、カルヴィンの教義に信仰の基盤を置くピューリタンの祭政一致の統治体系が確立されたのである。もちろん、分離主義者その他のプロテスタント諸派が容易にマサチューセッツ体制（ホストン）に組み込まれたのではない。それは後述する軋轢と混乱、反逆と弾圧の数十年の時を待たねばならないが、さらにアメリカが国王の免許の権威から完全に離脱、独立できるのは、まだあと一世紀以上もあとのことである。

(6) ここでわれわれは、ピューリタン信仰の内容について語る前に、先にプリマスに到着して植民に従事していたかの分離主義者たちについて、その歴史を振り返ってみなければならぬ。なぜならば、世界の常識によれば、「メイフラワー」でプリマスにやってきたこれら巡礼者たちこそピューリタンの代表だったと考える間違った伝統が定着してしまっているからである。アメリカの国内ですらそうである。例えば、一九世紀の詩人ロングフェローにしても、このプリマス移民のことを「ヤンキー」の代表だと歌いあげているし、ハイースタールの歴史書にも、Pilgrim Fathersが、分離主義者だったとのニュアンスの記述はない。

本来、Pilgrim Fathersらは英国プロテスタントの始祖の一人、Robert Browne による教会自由主義（信仰者は自分の教会をつくる自由をもつ。どの教会も他の教会に属さない）信奉する完全自由主義者のグループに属していた。彼らが居住していた地区は、今日のヨークシャー、Scrooby という土地であった。既成の一切の宗派をも權威をも認めないのだから、彼らの安住の地は、そこを出て「カム・アウト」して、他國に逃れ、そこに自分らの教会を建てる以外にはなかった。かくして一六世紀末、これら「カム・アウト」の脱出はつづき、かれを受け入れたオランダの国内ですら、第一、第二、第三の分離派教会が出来る始末だった。アングロサクソンの生活規範を崩そうとしない彼らの間には、この閉鎖された逃亡生活一二年の間の分裂抗争が相い続き、血族間の嫉妬、いさかきも絶えなかった。最大の悲劇はバージニア植民会社の誘いにまどわされた二〇〇人が（当時、この会社は破産に瀕していた）、体制側の信仰し

か許さない、この南の地に渡航しようとして、六月にも及ぶ難破の航海ののち、僅か五〇人だけが生存して、バージニアに辿り着いたことだった。

(7) 逃亡一二年の苦難は次第に最後の決断を迫っていた。神の恵みの夢は消えずとも、年齢は重なるばかりだし、子供らの教育の問題もある。さりとて、エリザベス、ジェームズと続く国王の移民免許を入手するてだては不可能に近い。英国に送り込んだ代理人たちもたらした情報は商業企業者による移民会社（それもバージニアで）の可能性のみだった。幾らかの前途金も出るという。二年に及ぶ激論の末、みなはこれを受けけることにした。なんとこの時、気まぐれ者のジェームズ王が、漁民ならばアメリカ行きを認めると言い出したからである。一行四五名は財産を処分し、行き先での漁業用にと、小型の船を用意して英国のサザンプトンへ向かった。一九二〇年七月のことである（この時の船出を描いた画はいまも有名だが、聖書のヨブのように見送る人は殆どいなかった。着いてみると、商業企業が募集してあった六〇名余の商業冒険者（宗教的には、多分、英国教会員）が大きな船、「メイフラワー」に乗って待っていた。そうしているうち、自分らが雇ってきた船は航行不能なことが判明してアメリカ行きを諦めた者もいた（これにもならんかの作爲があったという説がある―この船は立派に航行できたことが後で分かったので。やむなく総員百四名が「メイフラワー」に乗り移り、英国プリマス港を出帆したのは秋風の立ち初めた九月六日のことだった。こうして三月余りの航海の末（一度は引き返すことが協議されたが）、ようやく辿りついたところは、マサチューセツ湾の突端、鱈岬の先端だった。勿論、バージニア行きの話は一行の誰からも出なかった。植民の土地も英国とおなじプリマスという名で呼ぶことになった。一六二〇年も暮れようとする一二月二一日のことであった。

なお、こうして到着した植民者百四名のうち、オランダを出た宗教的移民者を「聖人」と呼び、途中で乗り込んだ一般の商業移民を「ストレージャー」（異邦人）と呼ぶのが、渡航の最初からのしきたりであった。こんな事情なの

で、王の免許はついに得られなかったが、その代わり、神の国建設を目指し厳格な聖職者統治が行われた。

(8) 聖人も異邦人も含めた Pilgrim Fathers のその後の苦難のこと(到着後三月して、二〇人以上が死亡した)、“野蠻人”インディアンの大酋長マッサソイト Massasoit —州の名の起こり—との出会い、その外交政策(懐柔策)、彼らの厳格で、一面では話題に富む生活規範のこと(例えば、婚前関係は厳禁—一〇月未満の子供が生まれると、両親とも姦通罪で処分)、すぐあとに北のボストンに大量に渡来した法治体制を整えたピューリタン移民との宗教的葛藤、土地の争奪(にも関わらず、経済的な依存性—交易の必要から)、そして最後には政治的統合などの詳しい歴史を語ることがは、ここではとても余裕がないだろう。しかし、ここに奇怪な事実がある。それはこれら聖人についても異邦人についても、名前に到着後の仕事についてはほぼ判明しているのだが、彼らがどんな経歴の持ち主で(聖人中のリーダー Bradford は知事となり、プリマス植民史を残している人なので、別としても)、どんな性格でどんなユーモアがあり(彼らはみなシニクスピアと同じエリザベス朝人だったはず)、正確な年齢は幾らで、とくに、どんな顔をしていたのか等の記録が一切残っていないのである。—ただ一人、兵士上がりのマイアルズ・スタンデッシュ Miles Standish (一五八四—一六五六)だけが、『海老』のあだ名で知られ、インディアンとの折衝に勇名を馳せているので、たぶん、赤い顔の男だろうと推理される。さらに、後に英国に渡り肖像画を作らせた男がいたから、これは別格だが、聖人の妻、娘たち、異邦人の女性たち(ヤンキー伝説で名高い Pocahontas にしても、異邦人(店主)の娘として到着後生まれたが、顔は分からない。のちに南北戦争の火付け人になるジョン・ブラウンの祖先のピーターにしても、異邦人の一人だった。遙かな未来、米国の大統領夫人となるデラーノ・ルーズベルトの祖先デラーノは仏人ながら、オランダでの聖人たちの信仰に共鳴し、ともにアメリカに渡ってきたのである(デラーノの名はメルヴィルの小説、『幽霊船』の船長としても登場する。実名である)。もちろん、こうした不幸な歴史の空白は以後のアメリカ人がこうした調査に関心を示すのが遅すぎたことに起因す

る。ようやく一九世紀になって、土地出身の政治家（ウエブスター）たちが国家的な立場から「巡礼の父祖」を顕彰するようになり、科学的な調査にも関心がもたれるようになったものである（先に書いたロングフェローのピューリタンの混同は彼の無知によるというよりは、武人スタンヂッシュが彼の遠い祖先だったという家庭的理由によるものらしい）。

(9) 分離主義者らから「共通の恵み、みなのお父」と仰がれた、William Bradford（一五九〇—一六五七）については、英国側の資料と合わせ、かなりの情報が得られる。その前に、彼の生涯に絶大な影響をあたえた恩師、William Brewster（一五六七—一六四四）について書いておく必要がある。シェークスピアがロンドンで名を売り出した一六世紀末の生まれ、ケンブリッジ大学に学ぶ。同級生にはのちの英国劇団の鬼才、マローやエリザベス女王の寵愛を一身にうけ、栄達の頂点を極めながら、一転して女王に反乱し、ロンドン塔の露と消えるエセックス伯爵がいた。『ハムレット』のモデルといわれる男である。もともと普通のピューリタンだったブルースターは、こんな環境から一変して、激しい改革者への道を選んだが、同志たちが次々に処刑されてゆくのを見て遂に意を決し、信徒八〇名を引導して、夜陰に粉れて深夜英国を脱出するのである。それも一回めは露頭し、捕られての再度の冒険であった。普通なら二日で渡れる英仏海峡がこの時は二週間を要した。聖書のヨブのように、神が試練を与えたもうたのである。こうして、先述のオランダでの逃亡生活が始まったのである。そして一同に長い逃亡の試練がまっていたことは先に書いたが、とくにブルースター師はこの時四〇歳という年にも関わらず、分離主義文書の地下出版を繰り返し、ために英国政府に追われたが、なんと英国に潜行し、メーフラワー出帆の直前に姿を現わすと、待ち合わせていた妻らとそこで再会し、アメリカへ渡来したのである。この時ブルースター既に五四歳であった。まだ二三年の仕事と生涯が彼を待っていた。まさに旧世界と新世界を結んだ改革者の一生であった。

なお、後のピューリタンが自分らの歴史を語るとき、自分らのアメリカ渡来を聖書の出エジプト記にいう「配流」

に準え、自分らは追われた者であり、かく追われて渡来した荒野は、“吼えうたく荒野”であると称するのが彼らの常套語だが、法秩序を無視し、万難を排して、“試練”に耐えてきたこれらの改革論者とその危険も試練もなかった正統ピューリタンの彼等には、どこかでイメージがダブって見えたのであろう。だが、歴史はこんな皮肉なしっぺい返しを用意していたのである。つまり、やがてボストン体制の内部から分離主義者が出て社会動乱を起こすのだが、その男を専断的に追放したとき、その男が自分を“配流”した行き先がなんとこの巡礼の父祖たちの間だったからである（その事件については、さらに次の項で述べる）。

この精神的指導者に導かれた William Bradford のアメリカでの経歴は、以後三六年間プリマスの知事をしたということのほかに、彼の著書『プリマス植民史』で明らかである。なお、プリマスがボストンを中心とするマサチューセツ体制の傘下に入るのは一八四八年、メイフラワーで渡来してから二八年後のことであった。

なお、苦難の果てにたどり着いた荒野の展望がどんなに非文明的で、荒涼と見えごとであらう——William Bradford の若い妻は鯉岬に到着した直後、海に溺れて死んだ。

ピューリタン神学のミステリー

——恩寵の契約と善行の契約 “Covenant of Grace” vs “Covenant of Works”

(1) さて、ピューリタン神学はアメリカにきて、独自の素晴らしい方法論的發展を遂げた。

いうまでもなく、英国ピューリタニズムは一六世紀の宗教改革者、カルヴィンの教義（ドグマ）を受け入れて發展した。その教義を簡単に書けば、1、神の絶対主権説、2、人間の自由意志の否定、3、予定運命説——選民のみの救

済、4、原罪説（アダムとイブの墮落以来、人間は徹底的に墮罪におちしものなり）であらう。

これらの命題を論理的に考えてみると、矛盾がある。例えば、人間は自由意志もなく、神の主権の前に全く無力だというのなら、信仰者はどうして神の恵みを期待できるのか？（これに反して、人間に自由な意志があればこそ、善行の契約を果たせるのだという信仰は英国、オランダなどで根強くつづくのである）。信仰とは神の恵みをより頼むこと、または神の恵みに触れることではないのか？ 神の恵みとは、人間の救済、つまり永遠の命そのものではないのか？ しかるに、カルヴィンはこういった信仰の基本に言及していないのである。アメリカのピューリタン神学者たち、とくにウインスロップが招聘した英国ピューリタンの神父、John Cottonはこの問題に対して、明快で『涙の流れるほど』（ウインスロップ）崇高な回答を出した。いわく、ピューリタン信仰の基本は神と恵みについての契約関係であり、この恵みによって人間の魂は『聖化（きよく）』される。かく聖化された魂は神の掟を破ることのないように善行をつみ、永遠の命を得るための善行を積まなければならない。これが covenant of works である。信仰はこの善行の契約でもある、というのだ。なお、聖化のことを Sanctification、永遠の命を得ることを Justification（神が義とせられるという意味で、『信仰積罪』とも訳される）、と英国ピューリタンらは呼んだ。John Cotton（一五八四—一六五三）ジョン・コトンはこの伝統の概念規定を拡大解釈したのである。

ちなみに、ジョン・コトンは一六三九年の正統ピューリタンたちが英国を船出した時にも祈禱をした神父であり、やがてポストン聖職者体制のリーダー、コトン・マザーの先代ともなるはずである。

(2) しかるに、この堅牢な構築による方法論にも『鬼火』のような反対論が現われ、やがて、ポストンの祭政一致体制を根底から揺るがす混乱と分裂を招くのである。Anne Hutchinson、ハッチンソン夫人（一五九一—一六四三）の出現がそれである。彼女はこのとき三四歳、ポストンの神父に就任していたジョン・コトンを慕って英国から渡来した

のである。彼女は一女の母でもあったし、夫も義弟も同行しての訪問であった。だが、大胆で、明晰で、機敏な彼女の才知は忽ち町の噂になった。彼女はボストンの教会の牧師の説教を聞いて帰ってくると、早速その批判を始めるのが人気をとり、彼女の家を訪れる女性の客の数は次第に増していった。その噂はますます大きくなっていったが、さらにそこへ彼女に最大の支持者が現われたのである。その時、僅か二三歳でマサチューセツ知事に当選した、英国の名門の出、Henry Vane（一六一三—一六六三）、ウェインがそうである。このことはウィンスロップ知事の影響力の陰りを意味していたが、それでも彼はまだ副知事だった。マサチューセツに革新をもたらすべく張り切っていたウェインも程なくして英国へ呼び戻されるのである。折から英国ではクロンウエルによるピューリタ革命（国王処刑）が進行中で、革新に燃える若いウェインは現職をなげうって母国の急に駆けつけたのである（このウェインという人物は複雑な性格な男だったようで、その前途には悲惨な運命が待っていた。クロンウエルその人のため投獄されたのみならず、王政復古がくると、当然、反逆者として断頭台の露と消えるのである）。

(3) だが、われわれはその前に、ハッティンソン夫人のピューリタン教義の批判がどんなものであったかを推理してみなければならぬ。残された記録は彼女の敵側、つまり、体制者側のものばかりであり、なかにはコトン・マザーの文章のように、彼女を魔女か怪物に扱い、女性だという一事のみで、聞くに耐えぬ侮辱を連ねた記事もある。それでも彼女の論理が「律法反対論」と呼ばれるものだったことは判明している、それはほぼ次のようなものだったと推理される。

ハッティンソン夫人はいった一人間に永遠の命を与える契約をされているがゆえに、信仰によって、その契約の成就を与えて下さるはずであり、人間はその成就を待つあいだ、悪なる自分が神の掟を破ることのないように、「準備」をするのが、つまり、善行を積むのがやはり契約の一部だ、と聖職者たちはおっしゃる。果してそうだろうか？

換言すれば、神は全能、人間は無力、自由意志もないのだから、何をしたら救われるのか知りようはないし、まして自由意志でやれることだって永遠の命にくらべたら物の数ではない。つまり、ピューリタンの教条に従う限り、今世と来世は永遠に繋がらない、何故なら、来世への条件を作る仕事に参画する機会には永遠にないといっているからである。予定運命にあるというのなら、恩寵の契約により、神は惜しみなく恵みを垂れたまい、人間の魂を聖化されるのみではない、真に信仰する清い魂ならば、神は聖霊をその人間の魂に宿らせたもうはず。聖霊の宿った人間はもはや人間ではない。Sanctification されたように見えることが、すなわち、Justification なのであり、『信仰罪』されたことなのだ。このような人間に掟を守り、善行を積み、来世への準備をするなどということは錯覚か、そうでなければ、神を汚す行為だ。マサチューセッツの牧師のほぼ全員がこの錯覚に陥っている、とハッティンソン夫人は集会で説いた。―そもそも神が個人に親しく福音をたまわるなどは、聖職者（教会）政治を蔑ろにする、危険千万な異端でなくてなんだろう？ 世人は初め啞然となったが、この人間自由の福音には抵抗し難かったという。

(4) このハッティンソン夫人の論理を『律法反対論』Antinomianism と世人は呼んだ。これに対して、ピューリタンの側で反駁できる範囲はせいぜいが次のような提言だけだった（自由意志による準備などは、それこそ極悪非道の異端ではないか？）―人間とは本来が不完全な存在であり、偽善などの悪徳からは完全に免れることはできない。だから、聖化されたように見えたとしても『信仰罪』を得たことにはならないという意味でなら、彼女の説も認めよう、しかし、聖化がなければ『信仰罪』もないのだから、やはり、聖化のための律法は必要なのであり、聖職者の莊嚴な必要性は欠くことができないのだ、と彼らは反駁した。だが、ハッティンソン夫人の論理を撃破することは彼らにはついに出来なかった。なぜなら、ピューリタンの教義に照らせば、彼女の論理はそれをそのまま裏返しにすれば、自由意志の否定に真つ向うから立ち向かいながら、恵みの契約そのものを否定するという限りにおいては（なぜなら、

信仰され清ければ、神は聖霊を人間の魂に宿したもう、彼女は叫ぶのだから、要するに、虚無的なニヒリズムにはかならなかつたからである。このことを近代が認識するのは、自由主義が確立した一九世紀末になってからのことである。

(5) ウェインという強力な支持者を失ってしまったハッティンズン夫人の語るも悲惨な生涯の終わりについては、前記コトン・マザーの毒舌の外に、一九世紀の小説家ホーンソンの神秘的な(しかし同情的でない)スケッチがあるが、幸いにして、彼女を魔女裁判とそっくりの裁判にかけて追放したときポストン体制側による尋問記録の一部が今日でも残っている。それを通読する近代のわれわれには、全体主義国のでっちあげ裁判を思わせる茶番劇としか映らない。尋問者たちの質問にしてもしどろもどろで、彼女の応答には付け入る隙がなく、彼女の知性に対抗しうるとは到底思えない。エリザベス王朝下、このような天才女性が生まれたとは誠に驚嘆すべき出来事である。長い退屈な尋問記録を紹介する代わりに、ここでは彼女の論理の罫に嵌まった裁判長ウィンスロップが最終的に返事に窮して述べた独断的逃げ口上だけを紹介しておくに留めよう。『われら一同はおまえのセックスの人間と議論をするつもりは全くないが、ただこれだけを述べておく。つまり、おまえは反逆的徒党に与し、それを推進しており、かくしてわれら一同の名譽を汚しておる。』⁴

(6) 滯米わずか九年にして荒野のなかで一家皆殺しに逢った彼女の悲惨な最期も手伝い、その後の歴史で、アメリカの女権運動が台頭するにつれ、彼女の姿がフェミニストのパイオニアとして強い脚光を浴びるようになっていったのは当然だったろう。なかには、ホーンソンの名作、あの『緋文字』の女主人公はハッティンズン夫人がモデルだったのだと分析する現代のウーマン・リブの指導者たちもいるくらいである。

(7) 『律法反対論』の嵐が終息したと思ふ間もなく、ニューイングランドには再び分裂の危機が訪れた。コトン・マザーがその主著『Magnalia Christi Americana』『キリストがアメリカでなしたもうた偉大な仕事』(一七〇二)で、そ

のときアメリカは「風車」のように回わったと風刺したのは、ロジャー・ウィリアムズによる「自由な宗教（祭政一
致の禁止）―英国教会からの完全離脱（分離主義）」の主張が蔓延したことを形容したものだ。もともと Roger
Williams（一六〇三―一六五三）はピューリタンらによるマサチューセッツ湾植民計画のメンバーの一人だったが、若
い彼はウィンスロップ知事らに同行することなく、翌年単独で渡来し、しかもボストン聖職者への誘いを拒絶し（そ
の拒絶の理由も、教会がこれまで英国教会の不浄さ（不浄とは―幼児洗礼のみで聖化されたと認める習慣のことを指したようだ）
を保ってきたことを懺悔する宣言書を出そうとしないから、というものであった。セーレムの町に「分離派教会」を
設立すると、完全に自由な信仰、祭政の分離、知事の司法権の禁止、牧師の俸給の禁止、インディアンの土地の不法
な接収の禁止などを主張した。とくに正統ピューリタンらが「善行の準備」を説くのみでは、みずからが『律法反対
論』の誤謬にはまりこんでゆきつつあった自己の矛盾と誤謬について鋭く指摘した。そして、自由な教会による「De-
mocratical freedom」が必要だと言ったが、この言葉をそんな意味で使ったのもロジャー・ウィリアムズが始めて
だった（当時、ウィンスロップら体制派が使っていた「Democratic」とは暴民的、俗人的という意味の政治用語に過ぎなかった）。

(8) コトン・マザーによって「荒野の教会に対する最初の反逆者」というレッテルを貼られたウィリアムズは、一六
五四年、ボストンで裁判に掛けられ、国外退去（追放）を命じられた。これが今日のロング・アイアランド州の始ま
りである。彼はそこへ落ちのび完全に民主的な教会と民主的な自治の方式を確立させた。彼の理論は、宗教的には、
むしろクエーカーやバプティストの狂熱に近かったであろうが、いわゆるアメリカの自由主義や民主主義はロジャ
ー・ウィリアムズの疎外者の生涯なくには考えられないのである。さらに、彼はバプチストだったという説さえある
（後述のブルークズ・アダムズ）。その後のアメリカにおけるバプティスト教会の国家的広がりを考えれば、彼のピュ
リタン不浄説は大きな歴史的意義をもつ出来事であったことが痛感される。

(9) この拘束的で不寛容で、謹厳なカルヴァイン主義がその正統性を追求するあまり行き着いた終点は次のような凄まじい永遠の命のビジョンだった―それはもはや一切の人間性を欠如した地獄だった―人間の理想ビジョンを開くためにとて、宗教改革に情熱を燃やした果てがこうだったとは――

「怒れる神は罪びとの皆さんを細い蜘蛛の糸にて吊るし、地獄の淵にぶら下げられ、おづましき虫ケラかなんぞのように、業火の上に晒しておいでなのです。神は皆さんを忌み嫌い、皆さんのため恐ろしく挑発されておいでなのです。(二七四一、七、八、エンフィールドに説教)。

アメリカンピューリタニズム再興の巨人といわれるエドワーズ、Jonathan Edwards (一七〇三―一七五八) の晩年の説教として有名なものである。彼の説教を聞いた聴衆のなから自殺者が相次いだ。だが、エドワーズの為に弁ずるならば、彼には『律法反対論』が神の恐ろしい絶対性を知らない楽観主義に見えたのである。その意味でこの点を論難しなかったコトナーマザーらのポストン体制そのものが「変節者”だと、彼はいった。

(10) これは英国側のエピソードだが、このエドワーズの評判は英国の論壇でも相当な話題になった。普遍教会の信者のワッツ (あの美しい賛美歌の作詩者) などはエドワーズの評判は英国の論壇でも相当な話題になった。普遍教会の信者のワッツ (あの美しい賛美歌の作詩者) などはエドワーズに同情を示しながら、宗教的寛容をすすめていたが、ロンドンでの一般の評判はかの保守の巨人、サムエル・ジョンソンの次の有名な言葉で代表されていた。

「私は全人類を愛するにやぶさかではないがね、このアメリカン人だけは別だね。」(と言いだし、散々痛罵したと伝記者のボスウェルが書いている―一七七八、四、一五)

前近代との断絶

—アメリカが伝統の拘束服を脱ぎ捨てる日—現代の新歴史主義が見る「自由のビジョン」

(1) アメリカのピューリタニズムは神の国のかがり火を自分たちだけが持ち、それで世界を照らし続けてきたと信じていた。だから、自分に反対する者に対しては一切の自由を否定し、弾圧してきた（作家アーサー・ミラーの言、一九五三）。そして彼らが、そのカルヴィン教条のゆえに、人間の本能の喜びを否定し、人間性までも抹殺しかねない信仰の城砦に立てこもってきたことの次第はざっと以上の如くである。そして、それにも係わらず、いや、それが契機となって、人間自由のアンティテーゼを誘発し、発展させてきた次第についても以上の如くである。

本稿の趣旨に則していえば、宗教的な『律法反対論』が近代的自我の起爆剤となったのである。“democratically government”という用語がロジャーク・ウィリアムズの言葉から発見できることは以上に述べた。このような立場から、ピューリタニズムからの“解放”こそが近代に、個人的自由主義に繋がっているという歴史観が一九世紀末に台頭してきた。完全に個人的なりベラリズムこそがアメリカ民主主義の本質だという考え方であり、そのような自由な社会の建設が American Dream の「ビジョン」として謳われるようになった。一九世紀末の史家、Brooks Adams の“Emancipation of Massachusetts”（二八八七）は文字通りそうした史観の代表である。ここで特記すべきことは、アダムズは祖先に二人の米国大統領をもつマサチューセッツの名家の出であるということ、さらにその兄はやはり自由主義のビジョンでアメリカの拘束的な伝統主義を痛烈に批判した小説『民主主義』を書いたヘンリー・アダムズだったという事実である（彼らの父は英国大使であった）。

(2) ピューリタニズムからの「解放」は一九世紀の半ばに訪れたアメリカン文学のかつてない開花によって実証された。アーヴィング、エマソン、アラン・ポー、ホーソン、ウィットティア、メルヴィル、ストー女史等の作家に一斉に見られる自我の拡大とアイデンティティの主張も、このような「解放」が達成されてはじめて水平線に見えてきたのである。

人間は墮罪に落ちし者、ゆえに次の世がどうなるかなどと憧れるのは罪を告発することにはほかならない。明日の事実に対しては、覆面を掛けよ。そうするのが人間である。因果律以外の暗号を読むことを人間の魂は許さない。

『大霊論』一八四一

人の宗教意識の開眼にはある種の狂気への傾斜がつきまとう。ソクラテスの夢想。クエーカーの癡撃、カルヴィンのリバイバル運動、みなそうだ。人は問う、不滅の命とはなんぞやと。その答えをキリストが残しておいでだと考えるのは狂信者のすることだ。キリストは真義愛の道德的情緒のなかにこそ生きておいでなのだ。

『大霊論』一八四一

アメリカン・ルネッサンスを代表する哲学者エマソン Waldo Emerson (一八〇五—一八八二)の言葉の一部である。これまでの記述に鑑み、もはやコメントは一切不要だろう。一語でいえば、ようやくにして「前近代」との断絶は告げられ、カルヴィンの拘束服はもはや通用しなくなったのである。

(3) 勿論、ピューリタニズムの理想ビジョンにホームシックを覚える一方では、その前近代的な誤謬と罪惡との意識に苛まれる時代人は多かったであろう。一九世紀の作家ホーソン、Nathaniel Hawthorne (一八〇四—一八六四)とメルヴィル、Hermann Melville (一八一七—一八九一)はこうした時代精神を最も端的に表現し、それにすら反逆の姿勢を見せつづけた作家だった。彼らが偉大だったのは、こうしてやがてくる「前近代」との断絶より、さらにもう

ひとつ先（暗黒で不毛の荒野の展望）をすで見越していたように思われるからである。

(4) 新しい世紀の舞台が回ると、果たせるかな、自由主義を基盤とした近代の没落がにわかに露呈された。T・S エリオットらの標榜する自由の崩壊、いわゆる「荒れ地」の時代精神がそれである。こうして、積極的自由のビジョンは否定され、いや、弁証法に止揚（しよう）され、否定的自由という自己拘束的な理想ビジョンに収斂されたのである。こうして今日では、ビュエリタニズムはアメリカの自我の形成の基盤だった」という説が思潮となっている。ひとつはこれを、“New Historicism”（新歴史主義）と呼ぶ。サッコンン・バーコウィッチの『アメリカ人の自我のビュエリタンの起源』（一九七五）は、七〇年代以降の保守主義の政治思想にマツチし、文字通り、一世を風靡したものである。そんな次第なので、バーコウィッチには、かの狂信的な地獄論者のビュエリタン、コトン・マザーが典型的体制擁護者に見えるのである。まさに“*Emanicipation of Massachusetts*”とは陰と陽が違うくらいに評価が逆転しているのは当然であろう。

(5) だが、ここでも歴史は皮肉な符合をみせるのである。新歴史主義の提唱は既に英国側から提唱されていたからである。――

人間が自由になれるのはある活きた、有機的な信仰する社会の一員となり、ある満たされぬことを満たそうとする場合においてである。

D・H・ローレンス『アメリカ古典文学の研究』

Me are free when they belong to living, believing, community, active in fulfilling some unfulfilled...

D.H. Lawrence Studies in Classic American Literature (1923)

ローレンスといえば、小説『チャタレー夫人の恋人』の著者である。彼の観察はどこかハッティンソン夫人の事件を連想させることを読者も理解されるであろう。つまり、ローレンスにいわせると、ユートピア・ビジョンの絆で結合された社会の下でこそ、人々は真に自由なのであって、荒野のただなかに放り出された人間に自由はないというのである。従って、ある理想ビジョンで結ばれた社会では、人は自由を制約される、いや、否定的自由しかないということになる。この論理の狭間こそ、アメリカの精神史が血みどろの闘争を展開してきた修羅場であった（もちろん、ひろく人類にとってそうだろうが）。

(6) 近代文明が到達した「否定の否定」、つまり弁証法もこれと軌を同じくするものだが、アメリカについて振り返ってみるならば、あの「恵みの契約と善行の契約」という論理にすでにこの弁証法の根はあったことが思いだされるのである。それと同時に、純粹に個人的な意味での、自由の福音の世界にこそ天国があると喝破したハッティンソン夫人は、遙かに遠い未来を先取りしていたことが認識されるのである。

こうした視点から見ると、現代アメリカの新歴史主義は『律法反対論』への再度の反駁であり、ピューリタニズムの新しいリバイバルだと言っていえないことはないと思う（ローレンスがアメリカ文学、とくにメルヴィルなどの鋭い分析者であることはいうまでもない）。

(7) “New Historicism”（新歴史主義）の流行によって、歴史はもちろん、文芸に関する批評に基準が大きく変化した。前述の正統ピューリタン、コトン・マザーに関する評価の目まぐるしい変化とか、『耕文字』の作家ホーソーンの前言者の意味の強調とかはその特徴的な事件の一つである。かつてのロマンティックな、審美主義的な解釈や批評は影を潜め、概念規定が分析に先行するという奇妙な現象も起こっている。その代わり歴史的なテキスト・クリティックの方法が急激に発達し、文献学はいよいよ重要となりつつある。

なおピューリタン信仰の閉鎖性をグロテスクに暴露した悲劇、一九六二年のセーレムの魔女裁判事件（処刑者二〇名、投獄者一五〇名）については、最も新しい調査によると、ホーストン体制側、とくに、コトン・マザーらの悪どい教唆と煽動につけこんだ社会的陰謀事件だったこと、さらに弾劾の当事者たちは作家ホーハーンの先代たちであり、この祖先の罪の意識が彼の文学の暗い謎にも繋がっていることをつけ加えておく（以上）。

*本稿は平成四年九月一二日、淑徳短期大学において開催された日本宗教学会第五一回学術大会の公開講演会でお話した内容を基礎として書き改めたものである。アメリカ・ピューリタニズムの研究に必要と思われる参考文献および書誌学については（英国のピューリタン文学関係、及び米国的一般歴史書は除き）、標準的なものは下記の通りであらう。

- Adams, C.F. The Three Episodes of Massachusetts Colony (1982, Boston)
 Antinomianism in Massachusetts Bay (1894)
- Adams, Books The Emancipation of Massachusetts (1887, Boston)
- Adams, Henry, Democracy, An American Novel (1880)
- Andrew C.M. The Fathers of New England (1919, New Haven)
- Barcovich, Sacvan The Puritan Origins of the American Self (1975, New Haven)
 American Jeremiad (1978, Madison)
- Boyer and Nissenbaum Salem Witchcraft Social Studies (1974, Harvard)
- Bradford, William Of Plymouth Plantation (1630—1650) -discovered, 1855, London)
- Breen, T.H. Puritans and Adventurers (1980, Oxford UP, New York)
- Brockunier, S.H. The Irrepressible Democrat, Roger Williams (1940, New York)
- Burr, G.L. Narratives of the Witchcraft Cases (1914, New York)
- Chase, Richard The American Novel and Its Tradition (1957, Garden City)
- Coillinson, P. The Elizabethan Puritan Movement (1967, Berkley)

- Cotton, John Christ the Fountain of Life (1651, Boston)
- Delbanco, Andrew The Puritan Ordeal (1989, Harvard)
- Edwards, Jonathan The Puritans in America, a Narrative Anthology (1985, Harvard)
- Hall, David D. Freedom of the Will (1754), Original Sin (1758)—New Edit. 1979.
The Atinominian Controversy, 1936—1638 (1968, Wesleyan UP)
- Hall, Michael The Last American Puritan, Increase Mather (1988, Middletown)
- Hawthorne, Nathaniel, The May-Pole of Merry Mount (1836)
The Scarlet Letter (1851), The House of Seven Gables (1852)
- Higham, John The Scarlet Letter (1851), The House of Seven Gables (1852)
- Hooker, Thomas New Directions, American Intellectual History (1976, Baltimore)
- Howard, Leon The Soul's Preparation for Christ (1626, Hartford)
- Hutchinson, Thomas Puritans and Puritanism (1986, New Mexico City)
- Katz, Stanley N. History of the Province of Massachusetts (176, London)
- Levin, Harry Colonial America, Politics & Social Development (1976, Boston)
- Mather, Cotton The Power of Blackness (1958, Athens)
- The Wonders of the Invisible World (1692, Boston)
- Cotton Mather Diaries
- Magnalia Cristi Americana (1702, London)
- Mather, Increase The Mystery of Israel's Salvation (1667—Boston)
- Matthiesen, F.O. American Renaissance (1852 New York)
- Melville, Herman Benito Cereno (1852) 『幽霊船』(岩波文庫, 坂下 昇訳)
- Michels & Pease America Renaissance Reconsidered (1985, Baltimore)
- Miller, Perry Orthodoxy in Massachusetts (1933, Harvard)
- The New England Mind, The Seventeenth Century (1939, New York)
- The New England Mind, From Colony to Province (1953, New York)

- Roger Williams, *His Contribution to American Tradition* (1970)
Errand into the Wilderness (1956, Harvard)
- The Puritans (1963-New York)
- The Puritan Family (1944, New York)
- The Puritan Dilemma (1958, Boston)
- Visible Saints, the History of a Puritan Idea (1963, New York)
- Builders of the Bay Colony (1930, Boston)
- The Winthrop Papers (Boston, 1927-1944)
- New English Canaan (1837, London: CF Adams' new edit., 1883)
- Main Currents in American Thoughts (1933, New York)
- Visionary Compacts-American Renaissance (1987, Madison)
- The Devil Discovered (Salem Witchcraft Story) (1991, New York)
- History of the Pilgrims and the Puritans (1922, New York)
- Cotton Mather, *The Life and Times of* (1985, New York)
- Puritans in Holland, their Troubles (1954)
- Democracy in America (New York Vintage, 1945)
- Salem Witchcraft, vols-2 (1867, Boston)
- The Simple Cobbler of Aggawam (1647, London)
- The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism (tr. 1957)
 (as referred to and accredited by Perry Miller)
- Manifest Destiny (1935, Baltimore)
- The Bloody Tenent of Persecution (1643, Narrangasett)
- Saints and Strangers, Pilgrim Fathers (1945, New York)
- Maule's Curse, Seven Studies in the History of American Obscurantism (1938, New York)
- Morgan, E.S.
- Morrison, S.E.
- Morton, Thomas
- Parrington, Y.L.
- Pease, Donald
- Robins E.A.
- Sawyer, Joseph
- Silverman, K.
- Stearns, R.P.
- Toqueville
- Upham, Charles
- Ward, Nathaniel
- Weber, Max
- Weiberg, A.K.
- Williams, Roger
- Willison, G.F.
- Winter, Ivor

Young, Phillip
Ziff, Larzer
Zweig, Paul

Hawthorne's Secret (1984, Boston)
Puritanism in America-a New Culture in a New World (1973)
Walt Whitman (his Puritan paradigm) (1984, New York)